ウェブサイト公開用

(様式10)
(海外特別研究員事業)
令和 2 年 7 月 28 日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

採用年度 平成30年度
受付番号 201860165
氏　　名 斉藤茜
(氏名は必ず自署すること)

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地(派遣先国名)用務地: ポンディシェリ　(国名: インド　)

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと違わないように記載すること。
中世サンスクリット文献における音、言葉、概念作用についての研究

3. 派遣期間：平成 30 年 7 月 1 日 ～ 令和 2 年 6 月 30 日

4. 受入機関名及び部局名
フランス極東学院ポンディシェリ支部

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意 **書式任意 (A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可)**
(研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等)
(注)「6. 研究発表」以降については様式 10－別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

ポンディシェリでの研究活動は、(1) マンダナミシュラの著作研究、(2) 正統シヴァ派の言語哲学という二つの軸に沿って進められた。

1-1: マンダナミシュラ研究: マンダナミシュラの思想解明が研究の核であるため、彼の全ての著作が研究対象となるが、その内、派遣一年目には Vidhiviveka と Brahmasiddhi に焦点を当てて研究した。研究はその中でも、彼の聖典解釈学の特徴を捉えることを目的としており、そのため、並行して古典ミーマーンサー（聖典解釈学）の典籍である、Mīmāṃsāsūtra やそれに対する註釈 Śābarabhāsya、また 7 世紀の偉大なミーマーンサー学者であるクマーリラバッタの諸注釈を読み進めながら、マンダナの哲学におけるミーマーンサー概念の重要性を浮き彫りにすることに努めた。一連の研究は、研究所所属のダヴィッド博士及びアンジャネーヤシャルマ博士の支えの下に行われた。大きな成果は、彼の Mīmāṃsāsūtra 6.5.54 と同 1.2.40 についての議論を論文にまとめたことである。

A: Mīmāṃsāsūtra 6.5.54 は「取り消し」(bādha) と呼ばれる聖典解釈学の重要な概念のひとつで、端的には祭式行為における要素 X が要素 Y を打ち消すことを意味するが、より本質的には、X と Y の間にある力関係を教える概念である。同ルール 6.5.54 は、その中でも「祭式のある特定の条件下では、後続する要素の方が先行する要素より強力である」という原則である。マンダナはこの原則を一般化し、認識論の文脈に応用した。即ち、人間に生まれながらに備わっている直接知覚という認識手段は、後天的に得られる文典からの知によって修正されることがある（例えば「地球は平面だ」→「地球は球体だ」)。この場合、直接知覚の真正さを主張するだけでは（＝目で見たものを信用するだけでは)、その知によって得られた情報が誤っていることがあるという状況を説明できない。マンダナは彼の基本的な立場として「知覚は錯誤する」と考え、それを、知覚についてさまざまな方向から考察することによって論証しようとするが、その中に、Mīmāṃsāsūtra 6.5.54 が唐突に登場する。祭式行為についての原則が、どうして認識論の文脈に矛盾なく応用されることができるのか。この問いを突き詰めると、マンダナの哲学の背後に、ミーマーンサーの伝統が強固に生きていることを証明できる。彼は単なるヴェーダーンタ哲学者ではなく、ミーマーンサーの知識をフル活用して自らの哲学を構築していった。その意味では聖典解釈学の偉大な祖であるシャバラ、そ

の後を継ぐ二大巨頭クマーリラとプラバーカラとの関係は切っても切れないものであるが、彼らを追従している訳ではない。寧ろ極めて冷静に彼らの思想を分析し、よいところは受け入れ、悪いところは批判して斥けている。その意味で、注釈文化とも言われるインドの哲学史において、独自の哲学を切り拓いたマンダナは際立っている。この成果をまとめた論文は、九州大学が発行する『南アジア古典学』にて出版され、また Journal of Indian Philosophy から英語論文で出版される予定である。

B: Mīmāṃsāsūtra 1.2.40 は「言葉は表示意図された意味内容を表示する」という原則である。言語論、その中でも言葉とその表示対象の間の関係は、ヴェーダ聖典を至上の判断根拠とするミーマーンサー学者にとって非常に重要な問題である。祭式行為中に唱えられる呪文（マントラ）は、一字一句違わずに唱えられねばならない上に、リグヴェーダの時代に使われていて古典サンスクリットの時代には既に意味が分からなくなっているものも存在する。このような呪文はそれでも「言葉」である以上、ただ発声することに意味があるのではなくて、表示意図された意味内容を伝えることを目的としている、というのが、この原則の大意である。さてマンダナは、これを特にプラバーカラ系の言明から導かれる「あらゆる文は義務（＝「せねばならない」）を理解させることを目的とする」というユニークな言語論に対してノーを突き付けるために利用した。Mīmāṃsāsūtra 1.2.40 は、必ず Mīmāṃsāsūtra 1.1.1 のシャバラ註の一文「自派ヴェーダ学習命令は既見のものを目的とする」とともに引用される。この一文は「ヴェーダ学習命令文」という、ヴェーダ文典中に存在するヴェーダ学習を命じる命令が、内容理解までを命じていることを述べており、「学習」が音声形の把捉ではなく意味理解までを含意していることを示唆するものである。この一文とともに用いられることで Mīmāṃsāsūtra 1.2.40 は、ヴェーダ学習命令文そのものも、文の意味理解を目的としていて、且つ言葉は、それが世間的なものであれヴェーダの言語であれ、表示意図された意味内容の認識に向かうものである、という原則にパワーアップする。これによってマンダナは、「命令文構造を持たないウパニシャッドは、理解の義務を目的としている」という主張を切り崩す。本研究の成果として、2019 年 7 月にウィーン科学アカデミーで開催されたワークショップにおいて、報告者はマンダナの Mīmāṃsāsūtra 1.2.40 の使い方を、Vidhiviveka と Brahmasiddhi の記述から検討する発表を行い好評を得た。この発表の内容については、2021 年中に日本語及び英語で論文として出版される見込みである。また 2020 年 7 月 4-5 日にオンラインで開催された日本印度学仏教学会第 71 回学術大会でも成果を発表した。

1-2: 派遣二年目には Brahmasiddhi と Bhāvanāviveka に焦点を当てて研究した。Brahmasiddhi については、第二章に登場する「力」という概念が、5 世紀の言語哲学者でありマンダナの思想の祖でもあるバルトリハリに由来するものであることに焦点を当て、彼の力に関係する議論がそれぞれ、バルトリハリの著作 Vākyapadīya のさまざまな議論から発展したものであることを明らかにした。この成果は 2019 年 9 月の日本印度学仏教学会第 70 回学術大会で発表し、短い論文が出版された。主として扱ったのは Vākyapadīya 第二巻だが、この巻の研究はまだ多くの余地を残している。今後引き続き研究を続ける予定である。
Bhāvanāviveka はマンダナの諸作品の中でもっとも研究が遅れている文献であり、先行研究は僅かしか存在しない。しかし彼のバーヴァナー論、即ち「行為論」を理解する上で、極めて重要な書物である。より厳密には、動詞語根と人称語尾から構成されるサンスクリットの定動詞の命令形において、言語のどの部分が「人を行為に向かわせる」のかという問いを立て、古代の文法家やミーマーンサー学者、ヴァイシェーシカ学派の思想などにも言及しながら、「行為」（bhāva）の本質を追求した論書である。本来派遣期間中に扱うことを予定していなかった文献ではあるが、ちょうどよい機会に恵まれたため講読研究会開催に踏み切った。その結果、既存の校訂テキストの内特にウンベーカ註にかなりの改善の余地があることが判明した。先ずは準備作業として全文を英訳・和訳し、科段と要約を作成して、内容理解の精度を高めた。その作業と並行して、インド全土の写本図書館に所蔵されている写本についてのカタログの調査を開始し、その結果、北インドにウンベーカ註の改訂に参照できる可能性のある写本が数本残っていること、更に Bhāvanāviveka には少なくとも一本未校訂の注釈が存在することが判明した。著者の名前は初めて聞くもので、歴史に埋もれ忘れられていた近代のミーマーンサー学者と思われる。幸運にもコロナ禍の中で写本を手に入れることができ、校訂の準備が整ったので、随時校訂研究へと進む予定である。成果は未発表。今後の研究の土台となる。

1-3: マンダナに関連した研究として、マンダナの思想の祖とされる 5 世紀の言語哲学者バルトリハリ研究が挙げられる。彼の著作 Vākyapadīya に登場する文意論や時間論など多くの理論がマンダナによって継承されているが、両者の間にどのような見解の一致或いは相違があったかは、まだ仮説の域を出ない。報告者はこのような現状に鑑みて、Vākyapadīya 第二巻の文意論に関わる部分を

集中的に読んだ。バルトリハリの自註は極めて難解なうえ、後代の注釈者プニャラージャの理解は、しばしば本来のバルトリハリの意図から大きく逸脱していると言われる。更に既存のテキストに問題が多く、Vākyapadīya そのものが再校訂を必要としている。報告者はダヴィッド博士が作成している二巻の再校訂テキストを用いながら、翻訳とテキスト修正作業を進めた。今後も二巻に的を絞って研究を続ける予定である。

2-1：正統シヴァ派の言語哲学研究：特にバルトリハリを源流とするインドの言語哲学は、マンダナ以降、さまざまな哲学に吸収されながら多様な発展を遂げることとなった。そのひとつの流れを探るために、報告者はシヴァ教の一派であり二元論を奉じる正統シヴァ派（シャイヴァ・シッダーンタ）を研究対象として取り上げた。正統シヴァ派は 10 世紀を境に、それ以前は北インドカシュミールで、それ以後は南インドで隆盛を誇る。膨大な神格・原理・祭祀行為についての術語を受け継いでいるため、専門知識なくしてテキストを読み進めるのは非常に難しい。10 世紀の前後に多くの優れた思想家が登場するが、報告者は、9–10 世紀のカシュミール出身の思想家と考えられるシュリーカンタに焦点を当て、彼の著作 Ratnatrayaparīkṣā を二年間を通して研究した。この著作は名前が示す通り、精神と物質の二元論におけるひとつの主軸、物質の根本原理について語った文献である。シュリーカンタについてはこの著作以外に作品が残っておらず、彼の出生や他の思想家との関係も未だ謎が多い。研究所所長であるグッダール博士の指導の下、12-13 世紀の南インド出身の注釈者アゴーラシヴァによる注釈とともに、先ず全詩節を読み切ることを目指し、科段と英訳・日本語訳を作成した。しかし読み進めるにつれて、アゴーラシヴァの説明がしばしば満足のいくものでないことに気づき始めた。南インドに文献が渡った後、正統シヴァ派の豊かな思想は画一化され、全てが同じように解釈され教化に用いられるようになる。その過程でシュリーカンタの本来の意図が読み取れなくなっている（そして恐らくアゴーラシヴァも正確に理解できていない）ことが多々あり、これだけでは思想解明に十分ではないと考えるようになった。

2-2: そのような状況の中、近年発見された Ratnatrayaparīkṣā に対する未出版の別注釈の研究に着手しているナポリ大学のスフェッラ教授とのコンタクトが、グッダール博士の尽力により実現し、話し合いの結果共同研究を行うことが決定した。新注釈の作者は不明で時代も分からないが、読み進めるうちに、アゴーラシヴァよりも格段に豊かで鋭い知識と思想を持っていることが判明し始めた。特にアゴーラシヴァが全く説明をしない難解なシュリーカンタの詩節に、非常に具体的で詳しい考察と解釈を示しており、明らかにその背後に、一貫し体系立てられた哲学が窺える。報告者は、スフェッラ教授が数年前に始めた校訂作業を引き継ぎ、氏の手順に従って校訂を進めつつ、同時に翻訳を作成しながら、講読研究会を定期的に行うことになった。写本はマイソールのものを底本としながら、ポンディシェリで新しく発見されたグランタ文字の写本と比較しつつ進めている。3 月以降コロナ禍により、研究所での大規模な研究会が禁止となったものの、グッダール博士やハンブルク大学のアイザクソン教授の参加の下、オンラインで毎週校訂と翻訳を議論しており、付加用務による滞在期間中の主な研究となるだろう。

3-1：上記 1, 2 以外の研究活動として、特に滞在中に大きな核となったものに、写本調査とその保全作業が挙げられる。サンスクリット文献は、多くが貝葉写本の形でインド各地に現存し、その中には未校訂・未出版、即ちその存在がまだ知られていない典籍も珍しくない。多くの民間の写本図書館は、経営難のため環境整備に全力を注ぐことができず、写本の状態は極めて悪く、自然災害や虫害により写本がどんどん失われているのが現状である。報告者は、研究所のダヴィッド博士とともに、ケーララ州トリシュールに存在するシャンカラ僧院に残る、写本図書館の全写本のデジタル化と保存活動を 2018 年より開始した。多くの写本が虫や黴の被害にあっているので、それらを取り除き、一枚ずつ埃を取り除き、レモングラスオイルを塗布して防虫措置を施し、僧院のメンバーとともにデジタル化を進めていった。このプロジェクトについては、2019 年 11 月にカルナータカ州のマニパル大学にて、デジタル化についてのパネルディスカッションを行い、デジタル化作業に携わるインド各地の研究者と議論することができた。プロジェクトは未完であり、大英図書館の助成金制度によって成立しているが、コロナ禍により大きく中断された。依然として第二期を始められないままになっているが、インドの混乱が収まり次第再開する予定である。

3-2：その他、二年の派遣期間の間に、さまざまな場所を訪れて世界各地の研究者との会合を行った。2019 年は春にタイのマヒドン大学での仏教論理学ワークショップに参加し、夏にはライプツィヒ大学にて仏教論理学ワークショップ、その後ウィーンに移動してマンダナミシュラ研究会に参加した。徐々に研究者としての力がついてきたと感じている。しかし先はまだ遠い。些事に惑わされず、サンスクリットをとにかく読み続ける環境を二年間享受することができたのは本当によかった。迷いは常にあるが、継続することに意味があり、それは最早義務に近い。